

ミカ書5-7章「小さき、へりくだった者」

1A ベツレヘムからの支配者 5

1B 安住の約束 1-4

2B 敵の征圧 5-9

3B 罪の除去 10-15

2A 主の訴状 6

1B 善のみを行われた方 1-5

2B 主が要求されるもの 6-8

3B 悪への刑罰 9-16

3A 罪の悲しみ 7

1B 善人のいない地 1-7

2B 罪からの立ち上がり 8-13

3B 祈りの答え 14-20

本文

ミカ書をおさらいしたいと思います。彼はモレシエテという、ユダにある小さな町出身の預言者でした。イザヤなどが預言していた時代、北イスラエルがアッシリヤによって滅ぼされる前に生きていた預言者です。預言は、北イスラエルの首都サマリヤから始まりましたが、すぐにユダに移ります。アッシリヤによってサマリヤが陥落しましたが、その後、ユダの町々をも攻め取っていきます。

そしてミカは、北イスラエルにあるものと同じものがユダにもあるという神の言葉を伝えました。貧しい者たちから取り上げて富んでいる者たちの姿です。預言者でさえも、自分に報酬を与える者には平安を預言し、そうでない者には災いを預言しました。けれどもミカは、「私は、力と、主の霊と、公義と、勇氣とに満ち、ヤコブにはそのそむきの罪を、イスラエルにはその罪を告げよう。(3:8)」と言います。そしてその地が荒廃することを告げました。

その中で、ミカは神が残された者を集めてくださるという、回復と憐れみの預言を行います。2章の終わりで、神は、羊の群れのように神は残された者を集めてくださり、主が先頭に立って、敵どもを打ち破ってくださると約束なさいました。そして3章から、イスラエルの支配者と預言者の悪を責めた後、4章から再び、イスラエルが回復する約束を与えておられます。終わりの日に、主の家から主の教えが出て、世界の諸国はそこに来て主を礼拝し、教えを聞きます。それゆえ、国々は戦うことをやめ、平和が世界に満ちます。

そして4章9節から、バビロンに捕らえ移されることを話されます。捕え移された地で、主が彼らをお救いになると約束してくださいました。ペルシヤの王クロスによって実現しました。それからアッ

シリアがエルサレムを取り囲んでいる姿が出て来ます。けれども、主が彼らを麦束のように束にして集めておられるのだという勝利を描いております。そして、これは終わりの日の幻でもあります。同じように異邦人に攻められるけれども、シオンの娘は立って、彼らを粉々に砕くことを知らせておられます。弱き者たちが強くなります、それは主が弱き者たちに付いておられるからです。「主我を愛す、主は強ければ、我弱くとも恐れはあらず。」です。

1A ベツレヘムからの支配者 5

そして5章です。5章は4章の続きであり、シオンの娘が敵に対して圧倒的に打ち勝つことを神が約束してくださっています。けれどもその人物が、人ではなく、実に神が立てられた王、キリストによって実現します。

1B 安住の約束 1-4

1 今、軍隊の娘よ。勢ぞろいせよ。とりでが私たちに対して設けられ、彼らは、イスラエルのさばきつかさの頬を杖で打つ。

ミカの預言は、将来の希望と今、差し迫っている現実を織りなして出て来ます。ここは差し迫っている現実であります。軍隊の娘とありますが、エルサレムがバビロンに対して対抗しているのですが、取り囲まれており、そして王ゼデキヤが捕えられる様子が描かれています。頬を王ネブカデネザルの杖で打たれるという屈辱を味わっています。しかし、ここがさらに深みのある預言であり、杖で頬が打たれるという預言はさらには、権威者から頬を打たれるイスラエルの王、キリストのお姿にも及んでいます。ユダヤ人のサンヘドリンにおいて、主は頬を打たれました。「マルコ 14:65 そうして、ある人々は、イエスにつばきをかけ、御顔をおおい、こぶしでなぐりつけ、「言い当てて見ろ。」などと言ったりし始めた。また、役人たちは、イエスを受け取って、平手で打った。」そしてローマ兵によっても打たれました。「15:19 また、葦の棒でイエスの頭をたたいたり、つばきをかけたり、ひざまずいて拝んだりしていた。」ユダの王ゼデキヤは、彼の罪のゆえに頬を打たれ屈辱を味わいますが、まことのイスラエルの王キリストは、罪を犯していないのにこのような仕打ちを受けられます。なぜか、この低められた姿、その弱められた姿にこそ、まことの神の力と公義が、神の霊によって現れるからです。

2 ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだが、あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になる者が出る。その出ることは、昔から、永遠の昔からの定めである。

キリストが、「ベツレヘム・エフラテ」から出てくる預言です。ベツレヘムという町は他にもゼブルンの地に同名のものがあるので、「ベツレヘム・エフラテ」と言って区別しています。エフラテは古い名称だったので、創世記に出て来ます。ラケルが葬られた時に、「彼女はエフラテ、今日のベツレヘムへの道に葬られた。(35:19)」とあります。エフラテは「実り豊か」という意味合いがありま

す。ユダ族の中の割り当て地にあり、エルサレムからは 10 ㎞南のところにあります。ベツレヘムの元々の意味は、「パンの家」です。ルツ記における、大麦と小麦の収穫のことを思い出します。車で 20 分ぐらい行けば、すぐにベツレヘムです。そこから支配者になるものが出て来るということです。

ここでの神の強調点は、「最も小さいもの」であります。そこから支配者となる者が出てくるということです。ダビデの父エッサイはベツレヘム出身であり、しかもダビデは八番目の末の息子でした。ここからダビデが出て来ますが、彼がユダとイスラエルの王となり、そして彼の世継ぎの子からキリストが生まれます。最も小さい者、低められているところから主が、力強い働きをされます。実際に、イエス様がベツレヘムでお生まれになってしばらくしてから、東方からの博士がエルサレムにいるヘロデ大王を訪れました。そして、ヘロデは「民の祭司長たち、学者たちをみな集めて、キリストはどこで生まれるのかを問いました」(マタイ 2:4)。そして彼らが引き合いに出した聖書箇所が、ここミカ書 5 章 2 節です。そして、博士たちがエルサレムに戻らずに故郷に帰ると、ヘロデは二歳以下の男の子を虐殺しました。主は、初めから迫害の中におられ、また難民として幼少を過ごされました。

そして神は、この王が出るのが「昔から、永遠の昔から」だと言います。このヘブル語は、ここまで永遠の昔を言い表せないほど、最も強い語調で永遠の昔を言い表しているそうです。ミカと同時代に預言を行っていたイザヤは、「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの(男の)子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は『不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる。(9:6)」と預言しました。赤子は神の御子であり、神と等しい方なのです。神が人となられること、その卑しき姿になられたことによって、それでご自身の働きを行われます。私たちが、主にあって生きる時、そのへりくだった中に力強い働きを主は御霊によって行われるのです。

3 それゆえ、産婦が子を産む時まで、彼らはそのままにしておかれる。彼の兄弟のほかの者はイスラエルの子らのもとに帰るようになる。

「産婦が子を産む」とは苦しみを受ける、ということです。キリストが地上に現れるまで、彼らは海の苦しみをしているような状態でした。そのままにしておかれ、苦しみの中であえいでいました。しかし主は現れ、同胞の民によって殺されてしまいますが、しかし三日目によみがえられ、天に上げられました。そして、五旬節の時に聖霊が弟子たちに降り、世界中からエルサレムに集まっていた弟子たちが悔い改めて、主に立ち返りました。ここに、「彼の兄弟のほかの者はイスラエルの子らのもとに帰るようになる。」とあります。そして、この働きは終わりの日に一挙に完成します。彼らは苦難の中に入れられますが、主が戻って来られることによって天の果て、四方から集められます。

4 彼は立って、主の力と、彼の神、主の御名の威光によって群れを飼い、彼らは安らかに住まう。

今や、彼の威力が地の果てまで及ぶからだ。

主イエス・キリストが再び来てくださり、神の国を地上に立ててくださり、その御名の威光によって、イスラエルの民が羊の群れのように守られ、安らかに住むことができるようになります。その理由が、「威力が地の果てまで及ぶからだ」と言われます。イスラエルの敵は周囲だけでなく、世界に及んでいるからです。

2B 敵の征圧 5-9

5 平和は次のようにして来る。アッシリヤが私たちの国に来て、私たちの宮殿を踏みしじるとき、私たちはこれに対して七人の牧者と八人の指導者を立てる。6 彼らはアッシリヤの地を剣で、ニムロデの地を抜き身の剣で飼いなす。アッシリヤが私たちの国に来、私たちの領土に踏み込んで来たとき、彼は、私たちをアッシリヤから救う。

これは当時の「アッシリヤ」の国のことだけではありません。終わりの日にイスラエルを攻めてくる世界の軍隊をも見据えています。当時アッシリヤがエルサレムを包囲する差し迫った危険を使って、終わりの日の型としている箇所です。「七人の牧者と八人の指導者」という表現は、「完全な、有り余るほどの」という意味です。エルサレムが守られるだけでなく、今度はイスラエルが圧倒的な力をもってアッシリヤ全土を征圧するという意味です。アッシリヤの地は、かつての「ニムロデの地」であります。ニムロデは主に反抗する権力者であります。世の権力者がキリストの力によって飼いなすられます。終わりの日には、イスラエルを攻め込んでくる軍隊の国々を、イスラエルがかえって征圧し、主の支配は世界に及ぶということです。

7 そのとき、ヤコブの残りの者は、多くの国々の民のただ中で、主から降りる露、青草に降り注ぐ夕立のようだ。彼らは人に望みをおかず、人の子らに期待をかけない。

すばらしいですね、ヤコブの残りの者、患難から救い出された残りの者は、人に望みをおかず、人の子らに期待をかけません。ここが、主が語りたことです。私たちが人に望みを置いている時は、神の民としてふさわしくありません。神こそが望みであるとする時に、御霊による働きは、ここにあるように「主から降りる露、青草に降り注ぐ夕立」のようになります。イスラエルは五月から十月半ばまで雨が降らない乾季です。その時に、朝露は夏の作物を育てるのに死活的になります。人に頼らずに、主のみ、キリストのみに頼む時に、そのような貴重な存在になるということです。

8 ヤコブの残りの者は異邦の民の中、多くの国々の民のただ中で、森の獣の中の獅子、羊の群れの中の若い獅子のようだ。通り過ぎては踏みしじり、引き裂いては、一つも、のがさない。5:9 あなたの手を仇に向けて上げると、あなたの敵はみな、断ち滅ぼされる。

主がともにおられるところのユダの軍隊は、異邦人に対して圧倒的な力を持ちます。キリストご

自身が獅子であられるので、キリストに付く者はキリストご自身の威力によって威力を持つということです。パウロは、「主にあって、その大能の力によって強められなさい。(エペソ 6:10)」と言いました。

3B 罪の除去 10-15

10 その日、主の御告げ。わたしは、あなたのただ中から、あなたの馬を断ち滅ぼし、あなたの戦車を打ちこわし、5:11 あなたの国の町々を断ち滅ぼし、要塞をみなくつがえす。12 わたしはあなたの手から呪術師を断ち、占い師をあなたのところからなくする。13 わたしは、あなたのただ中から、刻んだ像と石の柱を断ち滅ぼす。あなたはもう、自分の手の造った物を拝まない。14 わたしは、あなたのアシェラ像をあなたのただ中から根こぎにし、あなたの町々を滅ぼし尽くす。15 わたしは怒りと憤りをもって、わたしに聞き従わなかった国々に復讐する。

主は、ご自分の望みを置く者たちを強められ、自分たちの力や知恵に拠り頼む者たちを削がれます。神以外のものに拠り頼む要素は、これまでも預言者でたくさん出てきたものと同じです。一つは「馬や戦車」です。物理的に力を持つものに拠り頼むことです。そして、霊的に力を持つものが「呪術師」や「占い師」です。将来のことが分からない、不安になっている時に主に拠り頼むのではなく、これら占い師に向かいます。それから精神的なもの、宗教的なものに拠り頼んでいました。「刻んだ像と石の柱」です。この世的なものと言ってもよいでしょうか。そして「アシェラ像」を主は根こぎにされます。つまり性欲の神であり、今でいうポルノです。自分が拠り頼む対象として肉体的なものを選んでる姿です。これらのものを主がすべて取り除くことによって、彼らが心の中で、また肉の行ないの中で偶像としているものを捨てて、主の御名を呼び求める者には救いが与えられます。

2A 主の訴状 6

1B 善のみを行われた方 1-5

1 さあ、主の言われることを聞け。立ち上がって、山々に訴え、丘々にあなたの声を聞かせよ。2 山々よ。聞け。主の訴えを。地の変わることはない基よ。主はその民を訴え、イスラエルと討論される。

これまでも、「聞け」という呼びかけが何度かありました。多く、霊的状态が悪くなっている時は、主から聞かないで、自分たちの良かれと思っていることをやっている、自分の願いや正しいと思っていることをやっているからです。そして預言書の中で、法廷の場面を描いている部分が沢山あります。ここでは天地を証言台に立たせて、主がご自分の民に訴状を突き付けている場面です。なぜ天地を証人に立てておられるのか？それは、イスラエルが行ったことは人の目に隠せても、自然には隠すことはできないからです。主が、イスラエルとの関係をはっきりさせようとされています。

3 わたしの民よ。わたしはあなたに何をしたか。どのようにしてあなたを煩わせたか。わたしに答

えよ。4 わたしはあなたをエジプトの地から上らせ、奴隷の家からあなたを買い戻し、あなたの前にモーセと、アロンと、ミリヤムを送った。5 わたしの民よ。思い起こせ。モアブの王バラクが何をたくらんだか。ベオルの子バラムが彼に何と答えたか。シティムからギルガルまでに何があったか。それは主の正しいみわざを知るためであった。

イスラエルがまことの神から離れてしまったけれども、神の側に何か非があったのだろうか？という問いかけです。神が、イスラエルの民につまずかせるようなものを彼らの前に置いて、それで離れてしまったのであろうか？ということです。神が彼らに関わられたことはすべて、良いことばかりでした。エジプトの地から、奴隷であった彼らを買戻されたこと。そのためにモーセ、アロン、ミリヤムを送られたこと。そして、モアブ人の王バラクがイスラエルを呪うためバラムを雇ったのですが、バラムの呪いを主は祝福に変えてしまわれました。そして「シティムからギルガル」とありますが、シティムは民がヨルダン川を渡る前に、最後に宿営したところであり、ギルガルは渡った後に最初に宿営した所です。つまり、ヨルダン川を堰きとめて、無事にそこを渡らせてくださった神の御業を表しています。

どこをどう見ても、主がイスラエルにつまずきを与えるようなことは一切ありませんでした。むしろ、イスラエルが神に感謝し、神を敬う良い業しか行っておられません。それにも関わらず離れていったのです。これは私たち人間の姿でもあります。信仰を離れた多くの人々が、自分の背信についていろいろな理由をつけます。あたかも、神に不足があるかのように、神が躓かせたかのように理由を付けます。けれども、圧倒的に多い神の恵みの御業を思い起こすことがないのです。

2B 主が要求されるもの 6-8

6 私は何をもって主の前に進み行き、いと高き神の前にひれ伏そうか。全焼のいけにえ、一歳の子牛をもって御前に進み行くべきだろうか。7 主は幾千の雄羊、幾万の油を喜ばれるだろうか。私の犯したそむきの罪のために、私の長子をささげるべきだろうか。私のたましいの罪のために、私に生まれた子をささげるべきだろうか。8 主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行ない、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。

イスラエルの民が、神に不足があったかのように言っても主は、良いことしかされませんでした。そして彼らは、どれだけの犠牲を神は要求しているのだろうか？と文句を言っているのです。けれども、午前礼拝でお話したように神の要求されていることは多くありません、ただ公義を行ない、憐れみを愛し、へりくだって神と共に歩むことだったのです。それはいかにも地味な営みかもしれない。しかし主はそれを喜ばれます。地味な営み、小さき事、弱い者たち、そういったところから主は、世の権力者を倒すようなことまで行われます。

3B 悪への刑罰 9-16

6:9 聞け。主が町に向かって叫ばれる。・・御名を恐れることがすぐれた知性だ。・・聞け。部族、町を治める者。6:10 まだ、悪者の家には、不正の財宝と、のろわれた枳目不足の枳があるではないか 6:11 不正なはかりと、欺きの重り石の袋を使っている者を罪なしとすることがわたしにできようか。6:12 富む者たちは暴虐に満ち、住民は偽りを言う。彼らの口の中の舌は欺く。

主は彼らの行っている悪を責めておられます。「御名を恐れることがすぐれた知性だ。」と主は付け加えておられますが、私たちが、頭が良くなりたければ、賢くなりたければ、神を恐れることから始めなければいけません。けれども彼らが行っていたのは「狡賢さ」でした。上手に目方のはかりを変えて、不正に儲けていました。上の連中がこういう悪いことをやっていたのに、支配されている住民も嘘をつくことに慣れていました。日本社会では、あからさまにこのような姿は見ることはできないかもしれませんが、本音と建て前、他の意見を言わせないようにすること、そうやって偽善という偽りの罪が蔓延しています。

13 わたしもそこで、あなたを打って痛み、あなたの罪のために荒れ果てさせる。14 あなたは食べても満ち足りず、あなたの腹は飢える。あなたは、移しても、のがすことはできない。あなたがのがした者は、わたしが剣に渡す。15 あなたは種を蒔いても、刈ることがなく、オリーブをしぼっても、油を身に塗ることがない。新しいぶどう酒を造っても、ぶどう酒を飲むことができない。

自分たちが汗を流して労苦しても、その実を楽しむことができないということです。これは敵によって奪い取られるからです。これが、私たちが罪を犯しているときに神が懲らしめのために行われることです。自分が行っていることに成果が出ないのです。実が結ばれず、空しいのです。努力すればするほど、自分が願っているものから離れてしまうのです。けれどもそれは、神が与えておられる注意喚起であり、私たちは立ち止まって、主にあつて自分自身を吟味することができます。

16 あなたがたはオムリのおきてと、アハブの家のすべてのならわしを守り、彼らのはかりごとに従って歩んだ。それは、わたしがあなたを荒れ果てさせ、住民をあざけりとするためだ。あなたがたは、国々の民のそしりを負わなければならない。

北イスラエルにおいて極悪な王と言えば、オムリ家のアハブです。シドン王の娘であるイゼベルを妻に迎え、偶像礼拝をイスラエルに取り入れた王です。そして彼は、宮殿の隣のぶどう畑を欲しがって、ナボテを殺すという流血の罪も犯しました。この偶像礼拝や貪欲の罪が、いま、ユダにもはびこっているので、ユダの地も荒れ果てさせると神は宣言されています。

3A 罪の悲しみ 7

そして次から、語り手が「私」になります。神ご自身の「わたし」ではなく、預言者ミカが「私」と言っています。主が与えておられる裁きの預言に対して、へりくだって、悔い改める者たちを代表して

祈りを捧げています。

1B 善人のいない地 1-7

1 ああ、悲しいことだ。私は夏のくだものを集める者のよう、ぶどうの取り残しの実を取り入れる者ようになった。もう食べられるふさは一つもなく、私の好きな初なりのいちじくの実もない。2 敬虔な者はこの地から消えうせ、人の間に、正しい者はひとりもない。みな血を流そうと待ち伏せし、互いに網をかけ合って捕えようとする。

ミカは、敬虔な者、正しい者がいっさいいなくなったことを悲しんでいます。それを「夏のくだものを集める者」として形容しています。収穫が終わった後の畑の姿です。「正しい者はひとりもない。」という言葉は、ローマ人への手紙3章に出てくるものを思い出します。「義人はいない。ひとりもない。(10節)」正しい者は、だれもいません。

3 彼らの手は悪事を働くのに巧みで、役人は物を求め、さばきつかさは報酬に応じてさばき、有力者は自分の欲するまを語り、こうして事を曲げている。4 彼らのうちの善人もいばらのようだ。正しい者もいばらの生け垣のようだ。あなたの刑罰の日が、あなたを見張る者の日が来る。今、彼らに混乱が起きる。5 友を信用するな。親しい友をも信頼するな。あなたのふとこころに寝る者にも、あなたの口の戸を守れ。6 息子は父親を侮り、娘は母親に、嫁はしゅうとめに逆らい、それぞれ自分の家の者を敵としている。

「善人」「正しい者」と呼ばれている者でさえ、実はいばらの生け垣のようなのです。残りの民が「私たちの義はみな、不潔な着物のようです。(イザヤ 64:6)」とある通りです。そして私たちが神からの恵みで、信者にも不信者にも与えられている「人と人のつながりの情」がこれからなくなっていくます。自然に与えられている友人への愛、家族への愛が冷えてしまいます。主が弟子たちに話されたことです。「また兄弟は兄弟を死に渡し、父は子を死に渡し、子は両親に逆らって立ち、彼らを死に至らせます。(マルコ 13:12)」

7 しかし、私は主を仰ぎ見、私の救いの神を待ち望む。私の神は私の願いを聞いてくださる。

ここからミカの悔い改めが始まります。そして福音が始まります。このような末世にあって、それでも私たちは真の意味で生きることができます。ここの一言、「しかし、私は主を仰ぎ見る」ということによって、生きることができます。詩篇 37 篇に、「悪を行なう者たちに対して腹を立てるな。不正を行なう者に対してねたみを起こすな。(1節)」とあります。私たちは世の暗闇を見て、それに腹を立て、怒っても、そこから何か力が出てくるわけではありません。悪に対しては悪ではなく、善によって打ち勝ちます。それは、問題から目を離して、主ご自身を見つけ、見上げることです。主を待ち望むことです。主にあって喜ぶことです。良いものを見つめることです。その希望にあって生きるなら私たちは、どんなに世が暗くならうとも、光の子供として生きることができます。

2B 罪からの立ち上がり 8-13

8 私の敵。私のことで喜ぶな。私は倒れても起き上がり、やみの中にすわっていても、主が私の光であるからだ。9 私は主の激しい怒りを身に受けている。私が主に罪を犯したからだ。しかし、それは、主が私の訴えを取り上げ、私を正しくさばいてくださるまでだ。主は私を光に連れ出し、私はその義を見ることができる。10 それで、私に向かい、「あなたの神、主は、どこにいるのか。」と言った私の敵は、これを見て恥に包まれる。私もこの目で敵をながめる。今、敵は道の泥のように踏みにじられる。

罪から立ち上がる過程を、実によく表した祈りの言葉です。私たちが罪を犯したら、それを喜ぶ「敵」がいます。「神の民であるのに、こんなことを行なった。」と嘲ります。悪魔は、つまずいた私たちに対して、「お前はとんでもない罪を犯した。だから、キリストから引き離されている。お前がキリストに従うと言ったら、キリストの名が傷つく。立ち直ろうとするな。」と言ってくるのです。確かに主はこのような攻撃を、一時的に許されます。パウロが、教会で近親相姦の罪を犯している男について、「このような者をサタンに引き渡したのです。(1コリント 5:5)」と言いました。それは、自分が行ったことがいかにひどいことなのかを知るためには、一時的に神の守りを解除しなければならぬからです。

しかし、自分の罪を悔いて、主に立ち返るならば、そのへりくだりの心に悪魔は近づくことはできません。へりくだり、神に従う時に、既にそこに勝利が始まっています。悪魔は退くしかないので。「ヤコブ 4:6-7 しかし、神は、さらに豊かな恵みを与えてくださいます。ですから、こう言われています。「神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。」ですから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。」

11 あなたの石垣を立て直す日、その日、国境が広げられる。12 その日、アッシリヤからエジプトまで、エジプトから大川まで、海から海まで、山から山まで、人々はあなたのところに来る。

この「石垣」はイスラエルの家の石垣です。イスラエルが回復するときに国境も広げられます。具体的には、まず、「アッシリヤからエジプトまで」とあります。これはイザヤ 19 章 23 節から 25 節にもある預言です。北の大国の代表格と、南の大国の代表格が主の御前にひれ伏すことによって、イスラエルが真ん中で祝福を受けると預言されています。そしてもう一つは、「エジプトから大川まで」とあります。これはアブラハムに神が与えられた約束です(創世 15:18)。

13 しかし、その地は荒れ果てる。そこに住んでいた者たちのゆえに。これが彼らの行ないの結んだ実である。

これは今、間もなく起ころうとしている神の裁きです。ミカは将来に与えられる神の輝かしい回復を見ていると同時に、目に前に迫っている神の裁きも見えています。この神の裁きがあるからこそ、

後にその懲らしめの後の回復があるのだ、ということを知っています。当時の偽預言者が語っていませんでした。懲らしめなしの祝福です。罪が取り除かれることなしの約束です。

3B 祈りの答え 14-20

14 どうか、あなたの杖で、あなたの民、あなたご自身のものである羊を飼ってください。彼らは林の中、果樹園の中に、ひとり離れて住んでいます。彼らが昔の日のように、バシャンとギルアデで草をはむようにしてください。

ミカが神に対して祈っています。ダビデが「主は私の羊飼(詩篇 23:1)」と歌った、その神による養いと導きによって、私たちを取り扱ってくださいとお願いしています。「林の中、果樹園の中に、ひとり離れて住んでいます」というのは、主が優しく、他国の敵から守ってくださっている、保護してくださっている姿です。バアルがイスラエルの宿営を見て、「見よ。この民はひとり離れて住み、おのれを諸国の民の一つと認めない。(民数 23:9)」と言っています。そして「バシャンとギルアデ」は、それぞれゴラン高原とその南のヨルダン川の東側の地域ですが、そこでかつてマナセの半部族、またガド族とルベン族が、「ここは放牧に適しているので、私たちに割り当て地をして与えてください。」とモーセに頼んだ地域です。牛や羊が放牧で草を食んでいるように、私たちも安らかに住むことができるようにしてください、とお願いしています。

15 「あなたがエジプトの国から出た日のように、わたしは奇しいわざを彼に見せよう。」

主が優しく答えてくださいました。ミカのへりくだりと悔い改めの祈りに答えてくださいました。エジプトでの奇蹟をもう一度行なう、と約束してくださっています。預言書の多くの箇所、出エジプトの出来事の再現として、世界離散の民を約束の地に集められることを約束されています。

16 異邦の民も見て、自分たちのすべての力を恥じ、手を口に当て、彼らの耳は聞こえなくなりましょう。17 彼らは、蛇のように、地をはうもののように、ちりをなめ、震えながら彼らのとりでから、私たちの神、主のみもとに出て来て、わなないて、あなたを恐れましょう。

主を、神を認めていなかった者たちが、目の前ではっきりと神の顕現を見て恥を見る姿です。かつてパロがモーセに言ったように、「主とはいったい何者か。・・・私は主を知らない。(出エジプト 5:2)」という態度を持っている人々が、あまりにもたくさんいます。このような人々が味わうのは、ここに書いてある究極の羞恥心です。「ちりをなめ」とありますが、頭を下げるどころではなく、まったく一センチたりとも顔を上げることのできない、完全に従属している姿です(詩篇 72:9)。蛇もそれゆえに、地を這うものにされました。

18 あなたのような神が、ほかにあるでしょうか。あなたは、咎を赦し、ご自分のものである残りの者のために、そむきの罪を見過ごされ、怒りをいつまでも持ち続けず、いつくしみを喜ばれるから

です。

ミカが賛美をささげています。興味深いことに、ミカの名前は「ヤハウエのような方は、誰か」という意味ですが、彼が「あなたのような神が、ほかにあるでしょうか。」と驚いています。それは、神の豊かな罪の赦しのゆえです。どうか、ここにある罪の赦しの福音の言葉を、自分の心に焼き付けてください。これほどの罪の赦しの豊かさは、神以外に見付けることはできません。これが、神がキリストの十字架の上で決着をつけてくださったことです。ご自分の怒りの一切を、ご自分の子の上に置くことによって、罪のすべてを赦してくださるのです。主は慈しみを喜ばれます。

19 もう一度、私たちをあわれみ、私たちの咎を踏みつけて、すべての罪を海の深みに投げ入れてください。

最後に、罪を踏みつけてほしいという祈りで終わっています。「海の深み」とありますが、そこには「陰府の入口」があることをヨナ書は教えています。水の深みで溺れ死にそうになっているヨナが、「私は山々の根元までくだり、地のかんぬきが、いつまでも私の上にあります。(2:6)」と言いました。海は、地球の有害物質を浄化する働きがあるということを聞いたことがありますが、同じように罪を葬り去る場として主は定めておられます。最後の審判の時、海とハデスが死者を出しました。そして新しい天と新しい地には、海はもはやありません。このようにして罪を除き去ってください、という祈りです。詩篇には、「東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。(103:12)」と約束されています。私たちが罪の記録を捜そうと思って、神の書棚にあるファイルを逐一調べても、どこにも見つかりません。そういう状態です。これこそ、神の福音です！

20 昔、私たちの先祖に誓われたように、真実をヤコブに、いつくしみをアブラハムに与えてください。

ヤコブに約束してくださったこと、アブラハムに約束してくださったこと、それは創世記に書かれてある祝福の約束です。ミカにとっては数百年前に与えられた約束ですが、それでも神は真実な方であることを知っていました。神は私たちに対しても真実な方です。御言葉の約束を必ず成し遂げてくださいます。